

0. はじめに

私は、大阪大学法科大学院（高等司法研究科・既修者コース）を修了し、おかげ様でこの度の司法試験に合格することが出来ました。

以下に記す私の経験のうち、少しでも皆様のお役に立つところがあれば幸いです。

1. 法科大学院の授業の大切さ

この度合格させて頂いた後に、強く思うことは、司法試験は「法科大学院の学修」の到達度試験であったということです。

試験本番ではトラブルに見舞われましたが、法科大学院で積み重ねてきた愚直な努力は裏切りませんでした。

日々、法科大学院の授業を大切にし、一生懸命に研鑽を積むことで、自ずと法的思考能力が磨かれ、法曹への扉は開かれていくものと私は思います。

(1) 授業の予習の重要性

復習の大切さは言わずもがなですが、以下のように、私は予習にも力を入れておりました。

私は、法科大学院の授業 1 科目の予習に 8 時間程度はかけていたように思います。予習段階で、自分なりの理解をきっちりと構築しておくことで、授業で教えて頂いた内容と比較検討することが可能となり、いわば弁証法的に、盤石の理解が作り上げられていったように思います。

また、予習をしっかりとしていくことで、疑問点が明瞭になるため、授業後にすぐに先生に質問をさせて頂き、効率よく疑問を解消できました。授業はソクラテス・メソッドでしたので、授業全体との関係で重要と考える疑問点は、授業内で挙手して質問させて頂いたこともありました。全ての先生方が、授業内外で懇切丁寧に質問に応じくださり、心から感謝させて頂いております。

(2) 全ての科目を大切にすることで得られる学び

私は、一見、司法試験科目と関連性が強くないように見える科目であっても、全ての科目の授業に全力で取り組みました。

新しい知見に触れ、考えたこともないような未知の問題に果敢に挑戦することで、問題発見力や問題解決力が上がり、法的思考能力においても深みが増したと考えております。

2. 司法試験の対策

私が、今回の司法試験を受験するにあたってとくに重視していたのは、次の 2 点です。

①体系的理解（網羅性）

②答案技術（短く多くの点に触れる）

以下、この 2 点に触れた後、その他に気をつけた点についても触れておきます。

(1) 体系的理解（網羅性）

私は、全科目、基礎的な教科書を通読しました。

これまで、様々な合格者の先輩方と出会う機会がありましたが、優秀な成績で短期合格していった方の多くは、常に座右に基本書を置いて、こまめに基礎知識を確認していたように思います。

筆が速い方でなく、途中答案を避けるために過去問を書くトレーニングばかりしていた私も、やがて、基本書を通読するに伴い、問題で出題者から問われていることがスピーディーに把握できるようになり、暗中模索する中で無駄な記述をしてタイムロスするようなことが少なくなりました。

基本書を通読を怠り、出題者から問われていることが即座に把握できないと、手探りの無駄な記述が増えて途中答案のリスクが格段に上がってしまうため、過去問等の問題演習だけに偏った勉強にならないよう注意をする必要があると、私は常に自戒しておりました。

あまり難しい教科書を使うのは避けました。通読に時間がかかる点、基本事項の理解の妨げになる点、問われてもいないマニアックな知識・考え方を答案上に披露したいという悪しき欲求に駆られてしまう点、などがその理由です。

判例集についても、どうしても気になるものを除き、直前期は判旨のみを簡単に確認する程度にとどめました。重要判例は基本書にも出てくる（憲・民・刑については短答式の過去問にも出てくる）こと、解説まで読み込むと膨大な知識量になって途中答案のリスクが高まってしまうこと、などが理由です。逆にいえば、事案や解説などは、直前期ではなく、ロースクール在学中の時間があるときに読んでおくのが良いと、個人的には思います。

(2) 答案技術（短く多くの点に触れる）

私は、筆が速い方ではなく、また悪筆であることから、答案技術については人一倍、研究を重ねました。短く、そして多くの点に言及する方法を、自分なりに試行錯誤しながら体得していきました。

以下、その中で私が肝要と考えた点につき、記しておきます。

ア. 問われていることの把握

答案で無駄なことを書かないためには、出題者から問われていることを正確に把握できていることが大前提になると思います。そのためには、上記（1）の基礎的な基本書を通読が私にとっては不可欠でした。

イ. 言及すべき事項の選定（条文・要件・効果・判例・学説その他法的な考え方）

選択科目を除き、1科目120分という試験時間は、本当に短いと思いました。その中で、いかに多くの事項に言及できるかという点につき、次のような考えで、私は試験に臨みました。

（ア） 条文番号は、少ない文字数で点数につながるため最重要であると考え、問題に関連する条文は広く挙げました。関連する条文を答案にちりばめることで、体系的理解が示せるという利点もあります。

そのため、普段から基本書を通読の際に、条文をこまめに引いておくことを心掛けており

ました（民事系では併せて訴訟物という視点も考えておりました）。

（イ） 要件・効果は、短くても良いので、なるべく多く触れるようにしました。

そのために、三段論法を多用しすぎないように注意しました。三段論法は重要ですが、基本的には、事案の中に消極・積極の双方の間接事実が挙がっており、学説や事実評価次第で結論が分かれうるところのみ、三段論法を踏めば十分と考えました。充足が明らかな要件について、端的に「事実抽出→定義の充足→要件充足」を一行で短く書く技術も、三段論法と並んで非常に重要であると思います。

（ウ） 問題提起についても、問題の所在が見えづらい場合以外は、必要性は小さいと私は思っておりました。

ですので、私は問題提起をあまり用いませんでした。

（エ） 争点部分の規範も、短く済ませて、事実へのあてはめに素早く入ることを心掛けておりました。

そのためには、学説や判例にこだわりすぎないことも大事であると思っておりました。

私は、難しい最新の学説にこだわらず、事案に適用しやすい単純明快な学説や、自分にとってわかりやすい学説をなるべく自説にするように心掛けました。

理由付けについても、覚えたものを吐き出すのではなく、自分の理解の中で大切と考えるポイントを、自分の言葉で短く書くようにしました。

学説を忘れた場合や知らない場合も、自分の頭で考えたものを法的に無理のない範囲で端的に示せば十分と考えておりましたので、無理に思い出そうとして時間を浪費することはありませんでした。

判例の文言についても、考え方が合っていれば十分な点数がくると思っておりましたので、適宜、自分の言葉で要約して短く書いておりました。

判例の挙げる考慮要素なども、規範として答案に書くのではなく、考慮要素に該当する事実をピックアップするための、あてはめの指標として用いておりました。

ウ. 事実引用と事実評価の仕方

事実引用についても、すべてを丁寧に抜き書きする必要はないと思っておりました。

採点官の先生がどの箇所の事実の話をしているのかがわかる程度の事実の特定ができれば良いので、要約して短く事実を適示し、短く事実評価をして、結論を示したら、どんどん次に進みました。

この方法により、なるべく多くの事実に言及することを心掛けました。

（3） その他に気がつけたこと

ア. 答案をなるべく最後まで書き切ること

文章は短くわかりやすく、文字は大きく丁寧に、素人が読んでも分かるような親切な答案を書く、というのは理想的です。

しかし、試験には厳しい制限時間があるため、私は、理想論と現実論は区別しておりました。

そのため、最低限の判読可能な文字で、玄人中の玄人の採点官の先生に善解して頂けるような最小限の文章を、時間内に書き切ることを目指しました。

イ. 短答式試験の重要性

短答式試験の成績は、とても重要であると考えておりました。短答の点数は圧縮されるものの、絶対評価が最終成績に持ち越されるため、最終合格の合格率とかなりの相関性があるといわれているからです。

この点は、大阪大学ロースクールの先輩方も、過去の合格者報告会で、異口同音に仰っておられました。

具体的に私がやったことは、過去問、基本書の通読、条文を引いた際に何を規定しているのか分からないものをコンメンタールなどできちんと調べておく、などです。

ウ. 最後まで諦めない強い気持ち

試験本番では、どのようなコンディションであっても、それを運命として受け容れ、ベストを尽くし続けることが、一番大切なことであると思いました。

本番では、緊張・疲労・その他の外的要因により想定外のイレギュラーな事態が襲ってくる可能性があります。

私もそうでした。かつて経験したことのない劣悪な座席になり、座席交換の希望も容れてもらえませんでした。最初の選択科目は半分ほどしか解答できませんでしたし、その後の科目も血眼になりながら問題文を読まなければならない地獄を経験しました。それでも、延べ4日間を諦めずに最後まで闘い抜き、合格を勝ち取ることができました。

3. おわりに

大阪大学ロースクールの先生方、教務係の皆様、諸先輩、同級生や後輩の皆様には、在学中および修了後に本当にお世話になりました。この場をお借りして、心より御礼申し上げます。

在学生や修了生の皆様、最後までお読み頂き、誠にありがとうございます。何か分からないことやご相談などございましたら、お気軽にお声がけください。この拙い体験記を読んでもくださった皆様が、司法試験の合格を勝ち取られますよう、切に祈念いたします。

以上